

松林先生を偲んで

米田明美

松林靖明先生は、平成二十八年四月二十日に逝去された。訃報はあまりにも突然のことで、誰もが先日お姿を拝見したばかりだったので口にした。ほんの十日前まで、大学構内で学長の職務をこなしていらっしやったのである。病に犯されながらも、おそらくかなりの痛みがあたりだったと察せられるが、私たちの前ではそのような素振りには微塵もお見せにならず、颯爽としていらっしやった。最後の最後まで先生は、自らの信念と矜持を貫かれた。

甲南女子学園にとつても、ご家族にとつても、学会関係者にとつても、そして教え子たちにとつても、ただただ残念無念としか言い表せない気持ちで一杯である。それ以上に、これから学園のためになすべきことを計画し、且ご退職後の研究生生活を楽しみなさっていた先生自身が、心残りのまま逝かれたに違いあるまい。

先生は、何よりも学生のことを第一に考えていらっしやった。家庭の経済事情によりどうしても大学を続けられず、退学を余儀なくされた学生のことを、いつまでも気になさっていた。それ故「教育の使命」を何よりも口にされ、学生に対するご指導は厳しく熱心であった。学長に就任なさってから、学生からの強い要望で実現した文学散歩は、お忙しい中カラー刷りの資料を自らご用意なさり、京都の各場所で解説してくださった。もう五年前になるだろうか、暑い八月のことであった。そのあと冷たいビールを御馳走になったことは、実に楽しい思い出である。お酒を召し上がると、二言目には「うちの家内が・・・」と奥様のことを口に出された。お亡くなりになってから、奥様のそのことをお伝えすると、家では亭主関白で、縦の物を横にもしない人だったとおっしゃるが、おそらくそれは先生世代の人特有のポーズであろう。心の中はいつもいつも奥様への愛情であふれていらっしやった。

この二月四日、先生のお集めになった軍記物語関係の和書が、奥様のご希望で図書館に寄贈された。段ボール箱など大小取り混ぜて四十箱以上に及んだそうである。何百冊あるかまだ冊数さえもわからないが、これから軍記物語専門家の新潟大学名誉教授鈴木孝庸先生と松林先生の高弟山上登志美先生を中心にまず目録作りから始まるという。今後軍記研究を志す者たちにとって、何より貴重な資料となるであろう。図書館では「松林文庫」と名付け、大切に保管所蔵して下さることになった。

先生は、今も私たちのすぐ傍で、甲南女子学園の行末を見守ってくださいに違いない。またお逢いした時、しっかりと報告できるように、これからも先生との思い出や残されたお言葉を胸に刻み、前を向いて歩んでいきたい。